図書　紹介

豚インフルエンザの真実

人間とパンデミックの果てなき戦い

著者：外岡立人

発行：幻冬舎／〒141-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-9-7／
℡03-541-6211（編集部）／新書判／189 頁／価格 760 円（税別）／
2009 年 6 月 20 日発行

新型インフルエンザの新聞報道は確か４月 24 日からである。大型連休直前、国際空港での検疫を巡って宇宙服のような防護服つけた検疫官の作業はメディアが連日大きく取り上げた。空港での検疫などの水際作戦をめぐる議論や感染が確認された学校の謝罪会見、当初の混乱はなぜ起きたのか。

本書は、その当時を時系列に追い、専門家にとっても想定外の新型(豚)インフルエンザはなぜ発生したかを問うている。

第１章　ドキュメント・豚インフルエンザ来襲

第２章　世界史を変えたパンデミック

第３章　鳥インフルエンザの不気味な予兆

第４章　過剰にして穴だらけの日本の対応

次にサブタイトルを見ていくと、第１章では、突然現れたダークホース、ワシントンポストが報じた予兆—4 月 22 日、豚インフルエンザウイルス（Ｈ１Ｎ１）を確認、パンデミックミック発生を危ぶむ－4 月 23 日、人人感染が起きていることを確認－4 月 24 日、日本でも第一報が報じられる、パンデミックミックの危険性が世界に発信される－4 月 25 日、メキシコでの大量発生が明らかになる、警戒対象に入っていなかった豚インフルエンザ、WHO が緊急事態と声明を発表－4 月 26 日、フェーズ 5 への引き上げをめぐる政治的判断、フェーズ 5 への引き上げに慌てる日本－4 月 30 日、メキシコでの感染は既に３月上旬から?、空港での検疫強化はどこまで有効か、日本人初の感染者を確認－5 月 9 日、感染者に浴びせられた医学的根拠なき中傷、国内幹線はもっと早くから発生していた!? などドキュメンタリー風の 4、5 月の推移と自身の日記の記述である。

第２章ではペロポネソス戦争の勝敗を分けたパンデミック、中世ヨーロッパの人口を半減させた黒死病など歴史上のパンデミック、第３章では豚インフルエンザより遙かに強力、呆れるほど少ない国内報道など本来本命の H5N1 鳥 Flu と SARS の説明である。

第４章では遅れに遅れた日本の新型インフルエンザ対策、猟奇的殺人事件への興味と同じ、何も基礎知識を持たないまま右往左往する記者達、肝心なことを何も伝えない政府の記者は発表、世界中が驚いた日本の過剰反応、きめ細かい対策よりも優先されるお役所の都合、致死的流行病が広がったのではないなど、おわりにではいまだに抜けないお上への依存体質、自己本位の発想を象徴するマスク騒動、パンデミック防衛は地域住民の仕事、一斉に冷めていますマスコミ報道、公衆衛生の専門家を中心とした危機管理チームを、個人はまず「咳エチケット」からなど日本政府や日本人の対応不備への記述である。

新型インフルエンザは、連休明けからその影響は大きくなり、休校、修学旅行の延期の続出、企業の出張の自粛などもあり、5月 20 日の当学会の総会も関東方面からの出席が半減し、影響をもろに受けてしまった。その後、患者数は一旦減少するも夏場にかかわらず収束せず、7 月に入って厚労省は「本格的な流行が始まったと考えていい」と事実上の流行入り宣言した。国内の死亡者は初め疾患のある患者に限られていたが、次第に健常者に及び、秋には患者数は春の数千倍に達している。報道は春の過剰報道に懲りたのか極めて控えめで、ワクチン量の不足、輸入で対応やその副作用対策、接種の優先順位やその回数などの報道が多く見られる。いよいよその時期が迫ってきたのだろうか。

本書は、そもそもインフルエンザは多くの人に広く感染する特徴を持つ病気であり、一喜一憂するのではなく、冷静に警戒心を持ち続ける重要性を説いている。これから冬に向けてもしかしたら起きるかもしれない、起きるであろう真のインフルエンザ渦に備え、是非一読をお勧めする次第である。（学会事務局）